

世界文学を楽しむ会 第6回 ドイツ文学紀行

9月25日(日) 午後1時30分~3時 アキシマエンシス校舎棟 201号室

『車輪の下』の舞台を訪ねて 南ドイツ・カルフ

ドイツの南部方面の山岳鉄道のような一両だけの列車に乗りカルフ駅に降りたのは自分を含め3人のみ。歩を進めた先は静かな美しい町でした。周囲を山々に囲まれた谷のあまり広く



ない空間に、レンガ色からオレンジ色の4・5階建ての木造の家屋が並んでいます。ちょうどスイスの山中の光景のような感じ
です。

ヘッセの数ある作品の中で『車輪の下』はとりわけ日本人に読まれています。それは受験地獄と学歴優先社会の現代の日本にも通ずる何かがあるからなのかもしれません。「車輪の下」は読書感想文の定番というイメージを持っているようです。

『若きウェルテルの悩み』と『ファウスト』



「・・・ああ、僕の指が偶然彼女の指に触れたり、ぼくらの足がテーブルの下で互いに出会うことがあると、ぼくの全血管をわななき走り抜けるものがある！ぼくは炎に触れたかのように身を引く。・・・ぼくの唇に触れんばかりになる。そうすると、ぼくは雷に打たれたかのごとく、気を失いそうになる・・・」(ウェルテルの手紙の一端です)。

『ファウスト』は長編の戯曲(詩劇)で、天上界、神の世界、幻想の世界などいろんな場面や人物が出てきて正直とても難しいです。主人公ファウストがいかに悪魔メフィストフェレスに人間としての生き方を破られないでいくかが柱になっています。作品の概要とポイントをごく簡単にご紹介します。



ライン川紀行

・・・説明が終わると懐かしい「ローレライ」の曲が流れ始めました。<CDによるBGM> 両側にお城が続くライン川の絶景を筆者の撮影した写真で鑑賞していただきます。

ライン川の親父ライダー

クルーズ船の甲板

沿岸にある無数のお城

ローレライの乙女像



タイトル

皆さま、こんにちは。お忙しいなかご来場ありがとうございます。6月にロシア文学を取り上げてから3ヶ月、幸いコロナも少し落ち着いてきましたので、再び講座を開催することにいたしました。

これまでに取り上げてきたのは「ドン・キホーテ」「風と共に去りぬ」「赤毛のアン」「ロミオとジュリエット」「ハムレット」「罪と罰」「戦争と平和」の7作品ですが、

9月(今日ですね)ドイツ文学の「車輪の下」「若きウエルテルの悩み」「ファウスト」を、10月にはフランス文学の「三銃士」と「レ・ミゼラブル」、

そして11月にはこの世界文学紀行の総括として楽しい話題・エピソードいっぱいの「世界おもしろ比較文化」を予定しております(10月11月とも最終日曜日の午後、この時間の予定です)。

レジュメ等が出来ましたらまたあらためてご連絡申し上げます。

ではさっそくヘッセの「車輪の下」を、続いてゲーテの「若きウエルテルの悩み」「ファウスト」について取り上げてまいります。パソコン操作のためここから座って話しをさせていただきます。

ドイツの地図

これまでにドイツを訪れた方はいらっしゃいますか？ ありがとうございます。私の話は約1時間の予定ですが、その後の懇談会で感想とかご意見、あるいはご質問をいただければ嬉しいです。

『車輪の下』の引用は、集英社版 世界文学全集の第32巻 井上正蔵(しょうぞう)訳に基づいています。

著者が青春時代を送ったカルフ

(地図全体の説明<ベルリン、ハンブルク、フランクフルト、ライン川、歌に出てくるドナウ川ですね。カルフは小さな町でこの地図には出ていません。シュツットガルトのすぐ南、スイスのチューリッヒのすぐ北の方になります)

高校時代に新鮮な感動と共感を持って作品を読んでから約半世紀後になる2010年の夏、私は長年の夢がかない作者ヘルマン・ヘッセの生まれたドイツの田舎町カルフを訪れることができました。

ドイツの南部方面の山岳鉄道のような一両だけの列車に乗りカルフ駅に降りたのは自分を含め3人のみ(駅の時計)。歩を進めた先は静かな美しい町でした。周囲を山々に囲まれた谷のあまり広くない空間に、レンガ色からオレンジ色の木造の家屋や4階建ての家屋が並んでいます。ちょうどスイスの山の中のような感じです。

日曜日のせいだったのかもしれませんが。道路沿いのレストランのテラスでは地元の壮年がビールを傾け談笑していました。(ビールといったらやはりドイツ。どこに行って

もビールです)

道路も広場もそぞろ歩く観光客しか見えません。気がついたことは「ドイツの大都市では通ずる英語が、地方ではとても通じにくい」ということでした。

途中で出会った気よさそうな壮年にヘッセ博物館への行き方を尋ねたところ、ドイツ語が全くわからない私に身ぶり手ぶりで元気いっぱい教えてくれました。ところが指示された通りに行ってみるもそれらしき建物は見当たりません。

そこで再度、近くを歩いている壮年に確認してみました。すると：「あなた、まったく反対の方向に来ていますよ。ここからじゃ教えても難しいと思うから、私が一緒に行っておきますよ。きっと教えてくれた人も、むげに断るとあなたに悪いから、思いつくままを言ったんですよ。親切もこれだともう一步ですよええ！」。

そう英語で言って案内してくれる太った髭の壮年の、今度は本当にありがたい親切・・・なのでした。

高校時代の夏休みに

物語は高校時代の夏休みに初めて読みました。ドイツの優秀な若者が厳しい神学校の規律と生活の中で懊悩し、最終的に死に至る、という筋書きでした。この後取り上げるゲーテの「若きウエルテルの悩み」の主人公が、思うようにならない恋愛からピストル自殺をしたのに対して、こちらも未来のある若者が川に落ちて死ぬ、というストーリーです。青春を希望に燃えて生きようとする若者たちにとっては共感がある半面、何か割り切れないものがあるような気もしたものです。

物語の概要です。

主人公のハンスという少年は才能豊かでエリート養成学校の神学校に2位の成績で合格しました。町中の人々から将来を嘱望されるものの、学校の仲間と触れ合ううちに、勉強一筋に生きてきた自らの生き方に疑問を感じていきます。周囲の期待に応えるために、自らの欲望を押し殺しハンスの心身は疲弊していく。勉強に対するやる気を失い、ついに神学校を退学となる。

その後、機械工となり出直そうするが、挫折感と、昔ともに学んだ同級生への劣等感から自暴自棄となり、慣れない酒に酔って川に落ち死ぬという結末です。

『車輪の下』はヘッセが29歳の時に世に出た作品です。ヘッセ自身が修道院で過ごした青春の苦悩が軸になっている、と言われていきます。ヘッセの数ある作品の中で『車輪の下』はとりわけ日本人に読まれているようですよね。それは受験地獄と学歴優先社会の現代の日本にも通ずる何かがあるからなのかもしれません。

本作のタイトルでもある「車輪の下」という言葉は、作中で一度だけ登場します。ここでいう「車輪」というのは、社会や学校などで、ハンスを追い詰めていく制度的な存在のことです。周囲の期待を重い車輪に例え、それに押しつぶされていくハンスの人生をイメージしたものと思われれます。

情報が溢れている現代とハンスの時代は異なるかもしれませんが、この構図は今も存在しているのではないのでしょうか。大人は「良かれ」と思いながら過剰な夢と希望を託し、子供は期待に応えるべく心身をすり減らして自己を見失っていく…。こうして日本では「車輪の下」は読書感想文の定番課題というイメージを持っているようですね。

この4階建ての建物の真ん中がヘッセの自宅です。

ここでは私自身が特に感銘を受けた文章を「あらずじ」がわかりやすいようにストーリーに沿って綴ってみます。途中、大事と思われる、あるいは面白い文はスクリーンにも映し出しますが、全部は複雑になるので私が読んでまいります。

p114 シュワルツワルトのこの小さな町から、こんな少年が生まれたことはいままでに一度もなかった。(主人公のハンス・ギーベンラートのことですね)

p117 ああ、魚釣り。釣りのことなんかもうすっかり忘れてしまっていた。去年、受験勉強のために釣りを止められたときは…(自由が束縛され始めたころですね)

p127 エンマはこの町で一番かわいらしく上品な女性で、ハンスとは同学年だった。あのころ、エンマと語り合いたいとか、手を握り合いたいとか、そんなことばかり願っていた時期があった。(淡い恋心が芽生える年代です)

p161 不釣り合いな組み合わせの友達もあった。一番不釣り合いだと思われたのは、ヘルマン・ハイルナーとハンス・ギーベンラートだった。軽薄な少年と良心的な少年という両極端のふたりだが、どちらも頭がよく、才能あるトップグループにいた。しかし、ハンスは模範生という評判が高かったのに対し、その周囲の期待に応えようと自分を殺していくんですね。そして：

P…とあるのは文学全集の本のページです)

p176 「うん、これでよし。へたばらないようにするんだよ。さもないと車輪の下に押しつぶされてしまうよ」(ここで1回だけ「車輪の下」との言葉が出てきます。神学校の校長先生のハンスへの言葉です)

p193 (いろいろな事に悩むハンスは)…場所を見つけてそこを死場所と決めた。何度もそこへ行ってはすわりこみ、自分がいつか死体になって発見されることを想像して、不思議なよろこびを覚えた。縄をかける枝も見当をつけて、その強さも確かめた。(この頃からすでに悩み自殺も考えていたのですね)

p210(その一方、こんな一面もありました)エンマは、垣根ごしに手を差し出した。ハンスはおそろおそろその手をやさしく取って、軽く握った。その手が引っ込められないとわかると、勇気を出して、あたたかい娘の手を用心深くそうと撫でてみた。…今度は頬にあてた。…うっとりとするような疲労が…

p211 ハンスは娘の唇が燃えているのを感じた。その唇がひた押しに迫ってきて、ハンスの生命まで飲み干そうとするかのように、むさぼり吸っているのがわかった。…ふるえるような快感が気の遠くなるような疲労と苦痛に変わった。

p215 エンマはもう一度ハンスの手を取って、ふざけながら自分のコルセットの下に押し込んだ。すると、ハンスは、これまで知らなかった肉体の脈拍と呼吸をこんなに熱く近く感じて、心臓が止まり息が詰まって、いまにも死ぬのではないかと思うほどだった。

p216 ハンスにとっては甘さよりも、苦味のほうが多かった。

(うぶなハンスが同級生の女の子との接触に胸をおののかせるこの部分に、当時高校生でうぶだった自分も胸をおののかせながら読み進んだものでした)

p219 (その後、ハンスは神学校を止め、機械工として働くということの中に充実感を感じ始めます)・・・自分の手で、何かはっきりとした実用のもので作り出すというよろこびを味わったのはこれが初めてだった。

p225 こうやって、陽気に日曜日を過ごし、しごく当たり前のような顔をして、人生を解し、楽しむことを心得ている連中と一緒に、料理屋のテーブルに向かって腰をかけているのは、やはり悪い気はしなかった。

——こうしたなかでハンスは慣れない酒に酔い、川縁りで水に落ち、暗い川をゆっくりと谷間へ流れ下っていったようだった。

p230 どうしてハンスが水に落ちたか、知っているものはいなかった。

p230 「あんなにできがよくて、万事うまくいっていたんだがね。学校も試験も、それが急に不運が重なって・・・」

(と最後は周囲の関係者の言葉で結ばれています。私は主人公のハンスが神学校や社会での生活の中で結果的に『車輪の下』に押しつぶされたんだ、といった読後感を持ったのでした。

博物館はヘッセの生家から石畳を 100 ほど歩いた先にありました。木造の大きな 4 階建て。日本からの訪問者も多いようでした。受付で借りた携帯用音声ガイドには日本語も入っていました。展示室ごとの説明を聞いていくとヘッセの生涯がわかるようになっていました。

博物館の入り口の掲示、

ヘッセは極度の近眼で度の強い目がねをかけていたようです(2 枚)。

「ヘルマン・ヘッセと日本」とのタイトルで英語で書かれた新聞ですね、

原稿を書いていた机、

日本語のポスターが掲示されているのには驚きました。それほど日本からの訪問客が多い、またつながりが強いということでしょうか、

作品をたたき出したタイプライター、

作品を書く前の手書きによる構想書きだそうです、

展示室の入り口にあった訪問者の署名簿に、私は 50 年来の夢を叶えて訪れた感動をかなりの長文で書きこみました。

ノートに記したのはこんな内容です。

高校時代にあなたの小説を読んだときにはとても感動しました。

以来その物語の舞台を訪ねるのは私の強い願いでした。
あれから 50 年、ちょうど半世紀が経過した今、69 歳にしてこのカルフにやって来ることができました。
夢は実現し私はこれからこの博物館訪問のレポートを書き上げる予定です。
それは日本の新聞や雑誌に掲載されるかもしれません。私のホームページにも掲載します。
心からの感動と感謝を込めてここに署名をさせていただきます。
2010 年 6 月 6 日
清水武・東京のドン・キホーテ

左のページには日本語の署名もありますね。

なぜ『車輪の下』が読まれるのか。それは私の場合と同様に、読者が作品の中に自分の人生を重ね合わせようとしているから、といった面があるような気がします。

広くない町のあちこちの道路や広場にはヘッセの名前がついていました。美しいカルフの町もヘッセなしでは語れません。鉄道駅から比較的広い車道を横切ってすぐのところにはハンスが釣りをしそして最後に溺れたという川がありました。著者のヘッセ自身も若い時に釣りをした川だといえます。その川の橋の上でポーズを作っているヘッセと記念の写真を撮ってもらったところです。

ここからゲーテの作品に移りますがその前に、せっかくなのでちょっと立ち寄ったグリム兄弟の像や博物館、ドイツの街の乗り物の写真だけご紹介します。

街を走る 2 両連結のバス、トロリー電車(派手な絵が楽しい)、街の広場にたつグリム兄弟の像、遠足か何かで子供たちが先生と一緒に来ていました(2 枚)、グリム兄弟の博物館、グリム兄弟の物語に出てくる人間や動物たちの人形ですね

ではここからゲーテの二つの作品です。

ゲーテの顔写真

2010 年 6 月 8 日、小雨の降りかけた午後。フランクフルト中央駅から徒歩で 20 分ほどの中心街にある「ゲーテハウス」を訪れました。5 階建ての大きなハウスは、家の前の道路が狭く、全体像をカメラに収めるのがやっとでした。

各階には当時をほうふつとさせる家具や道具類が展示されています。

木造の階段を上り展示室に入る。ミシミシ(いやキシキシとも聞こえる)と、40 ㌢幅ほどの板を並べた床は、歩くたびに音をたてる。床は何万(いや何十万)の訪れた人々の靴に踏まれすり減っていて、さすが 200 年の歴史を感じさせました。

どの家具類も大きく、これは時計ですね。繊細で芸術的な飾りが彫られています。展示されている当時の本の厚さと大きさに驚きました。厚さ 10 ㌢、高さが 40 ㌢近くの本もありました。

原稿執筆前の構想書きのようです。

食器類や壁に飾った絵や調度品ですね(2枚)。

私は、ガラス窓で保護された本棚の前にしばしたたずみ、高校時代に読んだ作品に思いをはせてみたのでした。

まず、「若きウェルテルの悩み」(初版本)から：

作品は2部で構成されており、主人公ウェルテルが友人ヴィルヘルムに宛てた数十通の書簡によって構成されています。

第1部では、ある日ウェルテルは郊外で開かれた舞踏会でシャルロッテ(以下「ロッテ」と略称されます)と初めて対面する。彼は彼女が婚約者のいる身であることを知りつつ、その美しさと豊かな感性に惹かれるようになる。ウェルテルはロッテのもとにたびたび訪れるようになるが彼女の婚約者アルベルトが家に戻ると苦悩に苛まれるようになり、やがて耐え切れなくなりこの土地を去ってしまう。

第2部ではウェルテルは新たな土地に移って官職に就き、公務に没頭しようとする。しかし同僚たちの卑俗さや形式主義に我慢がなくなると退官。その後、各地をさまよった後ロッテのいるもとの土地に戻ってくる。しかしすでに結婚していたロッテとアルベルトはウェルテルの期待に反して彼に対し冷たく振舞う。

ウェルテルは自殺を決意する。彼は使いをやってアルベルトの持つピストルを借りようとした。傍らでその使いの用事を聞いたロッテは事情を察し衝撃を受けるが、夫の前ではどうすることもできず、黙ってピストルを使い渡してしまう。ウェルテルはそのピストルがロッテの触れたものであることに対する感謝を遺書に記し、深夜12時の鐘とともに筆を置き自殺を決行する、といったものです。

物語は作者ゲーテの実体験をもとに執筆された作品は評判となり、すぐに英語、フランス語、イタリア語に翻訳されヨーロッパ中でセンセーションを引き起こしました。ウェルテルを真似て自殺するものが多数現れ、自殺の連鎖を指す「ウェルテル効果」という言葉も生まれたようです。

ゲーテと同時代だったナポレオンは『ウェルテル』の愛読者であり、この作品をエジプト遠征の際にポケットに忍ばせて行き、7度読んだとのこと。

一言で言えば、典型的な恋愛悲劇ですが、時代が異なるとはいえ、昨今の軽い恋愛小説とは重さが違うような感じがします。

それにしても、礼節をわきまながらも、他の男性と結婚した新婚の夫人にいつまでも惹かれていくウェルテル。その行き着いたところがロッテの夫アルベルトから借りたピストルでの自殺でした。若者が悩みながらも命をかけて愛を求めていった姿が読者の共感と呼んだのではないかと思うところです。

登場人物のロッテの心と身体の美しさ。夫アルベルトの高貴な人間性。そして純な

心で悩み続けるウェルテルの世界は、現在の若者の社会ではなかなかあり得ないような気がしますね。

ここで物語の山場と思われる手紙の一端をご紹介しますと：

『若きヴェルテルの悩み』 世界文学全集<集英社>第7巻(柴田翔くしょう>訳)

からです。ページ数については先ほどと同じです。

ロッテのイラスト

p398 ああ、僕の指が偶然彼女の指に触れたり、ぼくらの足がテーブルの下で互いに出会うことがあると、ぼくの全血管をわななき走り抜けるものがある！ぼくは炎に触れたかのように身を引く。・・・ぼくの唇に触れんばかりになる。そうすると、ぼくは雷に打たれたかのごとく、気を失いそうになる。(すごくオーバーな表現の感じがしますね)

p437 ぼくはもう百度となく、殆ど彼女をわが胸にかき抱こうとした。おお、何という思いだ。これほどに心打ち解けた人がわが眼前を歩き来するのを見ながら、それをとらえんと手を伸ばすことが許されぬとは！(ウェルテルの強烈な想いですよね)

p453 何故、私ですの、ウェルテル？ほかならぬ私ですの、もう他の人の持ち物になっている？ほかならぬ決まった女ですの？・・・思い切って下さいまし！旅にでもお出になったら、多分、いえ、きっと、お気もまぎれましょう。そして、貴方の愛にふさわしい方をお探しになって、お見つけになって、そしてどうぞ、ご一緒に戻って来て下さいまし。そして私どもにも、真実の友情のこの上ない幸福をともに楽しませて下さいまし。(ロッテの言葉です)

p454 そうなのです、ロッテ！ぼくら三人のうち誰か一人は去らねばならず、そのひとりであろうと、ぼくは欲するのです！おお、いとしい人！・・・ぼくの墓に、あなたの視線を向けてください。

ピストル

p458 (ピストルを手に)これはあなたの手を触れてきたのですね。あなたが埃を払ってくださったのですね。ぼくはこれに千度口づけします、あなたがこれに触ったのですね。

p469 ぼくは君の友情を裏切ったが、アルベルト、君は赦してくれよう。ぼくは君の家庭の平和を乱し、君ら二人の間に不信の念を生じさせてしまった。さようなら！

ピストル

こうしてピストル自殺をするウェルテル。男女の間を綴った小説、若者たちの恋愛小説は今も世界に満ち満ちています。でも、いわゆる三角関係がこれほど「純」(あるいは「純粹な)な形で終わりを遂げる、というのはあまり無いのではないかと思うのです。小説の舞台として訪ねるような場所も無いので、この作品についてはこのくらいにして

次の「ファウスト」に移ります。

悪魔(メフィストフェレス)の誘惑と人間の道を求める『ファウスト』

世界文学全集<集英社>第7巻(井上正蔵訳)

ファウスト(ゲーテ)『ファウスト』(独: Faust)は、ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(長いですねえ)の代表作とされ世界的にも「人生哲学の塊」とも言われている長編の戯曲(詩劇)です。ゲーテは20代で書き始め書き終えたのは82歳の時、その後ほどなく世を去った。まさに生涯をかけた畢生の大著とも言えるでしょう。

天上界、神の世界、幻想の世界、歴史・政治の世界、架空の舞台などいろんな場面や人物が出てきて正直とても難しいです。専門家でもない私が論ずるのはおこがましくて出来ません。皆さまも「ファウスト」という本のタイトルだけはお聞きになっていられると思いますので、ここでは内容の概略をご紹介しますことで終わりたいと思います。

あらゆる学問を究め、知識の無力さに絶望した主人公・ファウストのもとに出現した悪魔・メフィストフェレスは、物語の冒頭で契約を結びます。そのメフィストフェレスの魔術によってファウストは官能快楽の限りを体験します。しかしこれらのすべてが自身を満足させられないことを知り、最終的には民衆の幸福のための理想的な国土を建設することを決意、他者への奉仕を始めていく、といった内容です。

実際、ゲーテは政治家としても生活に苦しむ市民のために各種の改革を断行しています。理想の社会建設に尽くす——これがゲーテの呼びかけだったのです。

私には**主人公ファウストがいかに悪魔メフィストフェレスに人間としての生き方を破られないでいか**か、が柱になっているように思われます。

ここでは作品の柱となっている場面をごく簡単にご紹介しますと:

最初の「天井の序曲」の中でまず神と悪魔との対話があります。

p15 **メフィストフェレス** では、賭けでもしますか？わたしは**旦那の手から、必ずあの博士(ドクトル)を奪ってみせます**。(「旦那」は神、「博士」——ファウストのことですね。悪魔の神への挑戦です)

主(神) ではよし、おまえに任せよう！あの男の魂をその根元から引き抜いて、おまえがやれるものならば、その魂を、おまえのみちに引きずり込むがよい。

だが、おまえは必ず恥じ入って、認めることになるぞ、よい人間は、どんなに暗い衝動にうながされても、けっして正しい道を見失うことはない、と、

<以下は口頭で>

ファウスト 悪魔を捕まえた以上、かんたんには手放さんよ。

メフィストフェレス 一年よりもずっと楽しませてあげます。(快楽の世界に誘い込む)

ファウスト あの、きたならしい煮汁で、おれの身体を30年も若返らせてもらえ、とい

うのか？

p80 (さまざまな儀礼とともに盃に薬汁を注ぐ。それをファウストが口にもってゆくと、かすかな炎が立つ)

メフィストフェレス さ、一息に！ぐっと！すぐに心が楽しくなりますよ。

(ここでファウストは若返るのです。そして…)

p106

ファウスト いったい、あの娘に抱かれる天国のよろこびとはなんだろう？あの娘の胸で温めてもらっていても、いつだっておれは、あの娘の苦しみを感ずるではないか？

(こうしてファウストはメフィストフェレスが誘い込む快樂の世界を経験していきます)

第二部は、王宮が舞台となり、ファウストとメフィストフェレスは皇帝に仕えます。

終盤で舞台は現実世界のドイツに戻りファウストは皇帝や大宰相、大司教などと共に民衆のための国家の建設に尽力していきます。

そして、(ファウスト、後ろに倒れる。死霊(死者の魂)たちが抱きとめ、その身体を地に

横たえる)との場面が出てきて、埋葬の際には天使の歌ほかいろんな合唱隊が歌います。フ

ファウストの魂は悪魔メフィストフェレスの手を逃れ空高く上がっていく。

こうして物語は閉じるのです。

なにか難しくてよくわからないですね。もっとやさしく深く解説できればよいのですが私の力不足で申し訳ありません。でも物語の構成とかイメージはなんとなく分かっていたのではないのでしょうか…

ところで、ゲーテはドイツの各地にその跡を残しています。ビンゲン市の裏山の高台もその一つでした。「ここから見たライン川が最も美しい」とゲーテが言ったという高さ300メートルほどの小山にドイツ在住30年余りでゲーテに詳しい友人Kさんの車で高台に登ってみました。

途中のブドウ畑です(2枚 日本のように棚は作らないんですね)。

登り切ったそこには「**ゲーテ展望台**」と大きな掲示があったのですが、なにせ作品の登場から約2世紀。周囲の木々の枝が伸びてきてライン川も見え隠れするほどになっていたのです。

それでも、**高台から望む父なるラインの光景は素晴らしいものでした。遠くには古城も見えました(計4枚)。**

それでは難しい『ファースト』はこのくらいにして、最後に楽しい「ライン川紀行」のク

クルーズ船と一緒に乗船してみましょう。

ドイツ文学紀行番外編「名曲の舞台を訪ねて」

タイトル:「ローレライ」の伝説を偲びつつ

ライン川紀行

ライン川の地図の説明……………

ライン川に沿って道路もあり、列車も走っています。6月の第一土曜日。乗船地のリュエデスハイム近辺では、200 人近くのオートバイマニアが爆音をとどろかせて“パレード”をしていました。見たところ、50 代から 60 代の“親父ライダー”。着衣もそれぞれが恰好を決め、500 ccとか 750 ccといった大型にまたがっています。(2 枚)向こうはライン川とクルーズ船ですね。

予期せぬハプニングでしたが、彼らとの会話もなかなか愉快で面白いものでした。「かっこよく撮ってくれよ！」なんて「いや本当にカッコイイですよ」

この日、3 階建てのクルーズ船にはちょうど 100 人ほどの観光客が乗っていました。移りゆく兩岸の光景がよく見えるように、乗客の半分以上が3階(甲板)に出ています。

3日前まではこのライン一帯も雨だったようでしたが、1日前から太陽が出て直射日光がきつい。甲板上の気温は摂氏 30 度近く。それでも湿度が低いので汗をかくというほどではありません。

上半身裸になって日光浴をしている北欧からの船客もいました。私はときどき自分の位置を移しながら、2台のカメラで移りゆく兩岸の光景をレンズに収め続けたのです。

ラインの水面は白緑(しろみどり)色でした。6 月初め、川辺の新緑を映すかのように、川底から湧き上がった水は緑色に濁ってました。“ゆったりと流れるライン”を想像していたが、予想以上の水量と速い水の流れ。その流れに乗ってクルーズ船はリュエデスハイムから下流(北)へ航行を続けていきました。

スイスのアルプスに源を発し、フランスの一部をかすめ、ドイツを南から北へ縦断、オランダを横断し北海へ注ぐ。全長 1,233 キロ。ドイツ国内を流れる川は 698 キロ。

(余談ですが、日本で一番長い川はどこですか？信濃川ですね。長さは 367 キロです。世界では 6695 キロのナイル川やアマゾン川、ミシシッピ川、またこのライン川は描かれても、世界の地図の中に日本の川が描かれているケースは滅多にないですよ)

そのほんの一部の区間ながら、クルーズはライン川の特徴ある景観を満喫できます。

それはこの近辺に古城が集中してあるからです。川の両側の山の中腹には、あち

ここに大小異なる城がそびえ、今は遺跡として中世の面影を留めているからです。

なぜこの一帯に城が築かれたのか。理由は地の利を生かした戦略上の意味があったことと、川を行き来する船から通行税を取るために、領主たちがこぞって城を建てたため、いわば城は税関であった、というのです。

<ゆっくりと各写真を写し、必要な解説をしていく>

乗船して川を下ること 1 時間余り。写真 78 流れの川幅が急に狭くなり、左に急カーブ、そしてまた右に回り、右手の大きな岩山を半円の形で巡るように航行して行きました。一帯の流れは速く水深もありそうです。かつては航行中の多くの船が事故を起こした場所だという。と、船内のガイド放送が5ヵ国語(独、英、仏、西、日)でなされました。

——ローレイという語は、(岩の意味)に由来している、といいます。

ローレイというのは、この高さ 130 ほどの右側の岩山を表すと同時に、この岩の妖精、ドイツの伝承に由来することです。

多くの話に共通するのは、ローレイとは不実な恋人に絶望してライン川に身を投げた乙女であり、水の精となった彼女の声は漁師を誘惑し、船は川の渦の中に飲み込まれてしまった、というものです。

説明が終わると同時に「ローレイ」の曲が流れ始めました。皆さまも昔歌ったことがあると思います。どうぞ CD の曲に合わせて口ずさんでください。

<CD の BGM を大きく>

なじかは知らねど 心わびて
昔の伝説(つたえ)は そぞろ身にしむ
寥(さび)しく暮れゆく ラインの流(ながれ)
入日(いりひ)に山々 あかく栄(は)ゆる

美(うるわ)し少女(おとめ)の 巖頭(いわお)に立ちて
黄金(こがね)の櫛(くし)とり 髪のみだれを
梳(と)きつつ口吟(くちずさ)ぶ 歌の声の
神怪(くすし)き魔力(ちから)に 魂(たま)もまよう

こぎゆく舟びと 歌に憧(あこが)れ
岩根(いわね)も見為(みや)らず 揚げばやがて
浪間に沈むる ひと舟も
神怪(くすし)き魔歌(まがうた) 謡(うた)うローレイ

(近藤朔風訳詞)

CD の音を小さく

皆さんはこの曲を習ったのはいつ頃のことでしょうか。私は小学校の6年か中学校の音楽の時間でした。曲は美しく、それから半世紀余りの今までの人生でもときどき口ずさんだこともあります。

ただ、歌の意味や背景についてまで音楽の授業で説明はなかったので、こんな伝説があるとは知りませんでした。今あらためて歌の背景を知ってみると、歌詞で綴られている情景がそのまま眼前の情景とつながってきたものでした。

少女の像

ローレライロックの写真 3 枚

ネットからの航空写真

「寥(さび)しく暮れゆく ラインの流(ながれ)

入日(いりひ)に山々 あかく栄(は)ゆる」

……クルーズ船は午後 4 時にありました。まだ太陽は真上近く高くあったけれど、夕方になってみるときっとこの通りの情景に変わっていくのだろうことも想像できました。

ががとした岩山が川に向かって突き出ています。渦は巻かないまでも速い水の流れ。伝説もさもありなんと思われてきます。この乙女伝説が歴史的にもあった事実なのか創造なのか、真実はわかりません。でも「ローレライ」が世界中の人々に口ずさまれている背景には、曲の美しさもさることながら、こんなロマンを誘う伝説があるのも力になっているのでしょう。

文学の世界でも、作品の舞台に取り上げられたことによって、あらためてその地が見直され、やがて観光の名所となっているケースも多々あります。以前にご紹介したイタリア・ベローナの『ロミオとジュリエット』の舞台キャブレット家もその一つですね。小説が世界的に有名になってから、キャブレット家の館が小説に合せて作られたように。

人間は心に想像(imagination)と創造(creation)の世界を持つことも大切なのです。「名曲の舞台の旅」は、私に心からの充足感をもたらしてくれたのでした。

以上で私の話を終わらせていただきます。

長時間のご清聴ありがとうございました。

この後、残りの 30 分ほど質問会や懇談会をこの場で続けてまいります。時間の都合でお話しできなかった取材の舞台裏のいろんな面白いエピソードもご紹介できると思うのでよろしければこのままお残りください。予定のある方はお帰りになっても大丈夫です。ご出席ありがとうございました。

それでは私も前に立ってご質問とかご意見を承るよういたします。

懇談会用のエピソード

ゲーテの呼び方の川柳

大学時代に4年間もドイツ語を勉強させられましたが、今は何も残っていません。残っているのはゲーテの名前についてのエピソードくらいです。

ゲーテ (Goethe) のドイツ語での発音は日本人には難しいこともあり、日本語表記は、古くは「ギョエテ」「ゲョエテ」「ギョーツ」「ゲーテ」「ゲエテ」など数十種類にもものぼる表記が存在した。このことを諷して明治時代の小説家、随筆家の斎藤緑雨が「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」と言ったというエピソードを何回か聞いたものです。

唯一記憶に今も残っている言葉は「イッヒ リーベ ディツヒ」です。

これは英語の「アイ ラブ ユー」と同じです。

誰もが1回は、あるいは何回も使う、言ってみれば”国際語“ですね。

私はその後、現役時代中南米に派遣されスペイン語をやらなければいけなかったのですが、その時も同じでした。

スペイン語では「ジョ テ キエロ」(私はあなたを愛しています)と学び、そのフレーズは今でも覚えているから不思議です。

- 世界文学紀行をすることになった動機 → ホームページ全集の裏ページの内容紹介
- 旅行日程、費用とその算段
- 旅行中にあった危険(ニューヨーク空港での体験など)